

「提言のたたき台(H15.9.25版)」に関する委員のご意見

増田委員

- ・「はじめに」...上流域での集いの参加者が少ないのは関心がないのか気になる。また、上・中・下の意見は全く一致しないものがある事を調査して頂きたい。
- ・「流域及び河川の概要」...下流域では遡上がなく、約2km上流まで満潮時に海水が遡上しており、このために井戸が塩水となり農作物に塩害あり。
- ・「基本的な考え方」
 1. 全般的な考え方...100年に一度と勘案すれば、過去100年のデータを詳細に検討する事が必要。
 2. 治水...昭和51年の大洪水がデータから外れている。この治水の実態をもっと知ってほしい。
 3. 利水...取水権の見直しは是非必要。戦時下の利水延長や製鉄を止めた工場が取水をしている。
 4. 自然環境...下流域では昭和35~45年頃、川砂利を採取してから海水が遡上するようになった。また、上川原地区で伏流水をポンプアップし、鉄板を東へ約1km打ち込んだのは環境破壊である。
 5. 流域社会との関わり...地域社会の勉強として揖保川の実態を生徒たちに正直な説明ができない。
 6. 情報交流...今のところ情報交流は無きに等しい。漏れ聞く情報は憂慮する事が多い。
- ・「整備計画のあり方」
 1. 治水...畳堤は現在の京間の畳サイズが小さくなり、家庭での枚数確保が心配される。
 2. 利水...取水のための堰(上川原)に水を取り過ぎているのではないか。また、一部地区の取水ポンプ場があり、その地区の収入源になっている所があると聞く。
 3. 自然環境...川床の掘り下げによる海水の遡上は潮止めをつくる必要がある。
 4. 河川空間の利用...中流域での川幅の狭い所にグラウンドを作っているのは空間利用の範囲を超えている。他の流域から見るとおかしい。
 5. 連携による一体的流域管理...私は昭和17年夏、引原ダムの測定の草刈奉仕に動員され、昭和18年には西栗栖の農業用水ダムの土盛作業の奉仕にも学徒動員された。あれから約60年を経て敗戦と戦後の高度成長に揖保川の有様、上流域・中流域・下流域の状況格差は大きく違っている。こうした現況で、連携による一体的な流域管理は論理的にわかっているにもかかわらず実際の管理の方法は難しい。下流域の枯死した揖保川を再生させてほしい。取水した水が川に還元できない量は増大していくと思われる。
- ・「整備計画策定時の住民意見反映のあり方」...下流域では約30年前に網干川(新家)の埋立を行った。その後に興浜地区と浜田地区の整備計画で住民の立ち退きと引堤をしたので工事の後遺症を残している。